人権コラム「きずな」1月号

カランコエの花

大阪教育大学　神村早織

最近は日本でも、いわゆる LGBT 当事者を主人公として描いた映画やドラマが制作されるようになった。私のお気に入りは、今春テレビ東京で放映された「きのう何食べた？」である。弁護士のシロさんと美容師のケンジのふたりの生活を、日々の食卓を通して展開していく。そこにあるのは、小さくてあたたかな幸せを求めるふたりの暮らしだ。

ケンジはオープンリーゲイであり、シロさんはクローズドだ。そのことが、「周囲の人々」との関係の中で、ふたりの間に隙間を作ることがある。ドラマの中では、彼らの日常のふとした瞬間に、「悪意のない」アウティングや、「善意による」カミングアウトの圧力が描かれている。それは時間にすれば、ほんの一瞬のことだったりする。おそらく、多くの「周囲の人々」にとっては、気づきもしないことであり、不可視化されているものだ。

さて、今日お薦めしたい映画「カランコエの花」も、LGBT をテーマにしたものである。しかし、この映画の主人公は当事者ではない。主人公は「周囲の人々」すべてであり、この映画は「周囲の人々」の一人一人の視点から構成され、描かれている。そして、だからこそ、この映画を見た人たちは、LGBT を理解するために見るのではなく、映画を通して自分自身と向き合うこととなるのだろう。

わずか 39 分の短編映画にもかかわらず、映画祭でグランプリを含む計 13 冠を受賞している。当初は東京新宿の映画館での１週間限定公開の予定であったが、その後、全国各地に上映会が広がった。いわゆるロードショー上映ではないため、あまり知られてはいないが、高い評価を得て、現在は DVD レンタルもされている。まずは、WEB 上で公開されている予告編の視聴をお薦めしたい。

ある高校２年生のクラス。予告編では、黒板に大きく「LGBT」と書いて授業を行うひとりの教師の姿が映し出される。しかし、他のクラスではその授業は行われていないことを察知した生徒の中から、「なぜうちのクラスだけ？」という疑念が生まれる。

予告編の中盤では、「もしかしたらさ、うちのクラスにいるんじゃね」と言い放つある生徒のセリフが、見る者の心を刺す。この後、映像は、教室や登下校などの日常を背景に、同級生の中に「当事者」がいるのではないかという状況の中で、様々な生徒たちが疑心暗鬼になり、葛藤する表情を映し出す。クラスの生徒たちの変化を、「周囲の人々」の視点から、相互に交錯しつつ、鮮やかに描いているのだ。

映画のキャッチコピーは「ただ、あなたを守りたかった」だ。果たして、この声は、誰に届けようとしているのか。「カランコエの花」というタイトルは何を意味しているのだろう。そんなことを考えながら、映画の本編を見ていただけたらと思う。